

著者/タイトル/出版社(出版年)	表紙	概要
<p>小熊英二 日本社会のしくみ 雇用・教育・福祉の歴史社会学 講談社現代新書 (2019)</p>		<p>女性や外国人に対する閉鎖性、「地方」や非正規雇用との格差、転職のしにくさ、高度人材獲得の困難、長時間労働のわりに低い生産性、ワークライフバランスの悪さなどの大きな閉塞感を「日本の仕組み」は生んでいる。 日本社会における雇用、教育、社会保障、政治、アイデンティティ、ライフスタイルは、その時代その時代で最適と思われる決定の積み重ねで規定されていったものだ。それらを総じて、筆者は「日本社会のしくみ」と読んでいる。 「日本社会のしくみ」として明らかにされる構造と力学の理解なしに、今後求められる社内の改革を興すことは容易ではない。</p>
<p>田坂広志 知性を磨くー「スーパージェネラリスト」の時代 光文社新書 (2014)</p>		<p>「精神の弱さに流されない迅速な意思決定」"腹決め"を可能にするのが"知性"。 すなわち、「これで行くしかないか…」と、腹も定まらず、受動的に意思決定するのではなく、「これでいこう！」と腹を定め、能動的に意思決定することである。 その逆が、「割り切り」。考えてもなかなか答えの出ない問題を前にしたとき、「知能」は、この「割り切り」という行為に走る。…決して間違ったことを言っていない。しかし、こうした判断の奥にある、心の姿勢が、実は問題。「割り切りとは、魂の弱さである」 我々の精神は、その容量を越えるほど難しい問題を突き付けられると、その問題を考え続けることの精神的負担に耐えかね、「割り切り」を行いたくなる。問題を単純化し、二分法的に考え、心が楽になる選択肢を選び、その選択を正当化する理屈を見つけ出す。</p>
<p>紺野登 利益や売上げばかり考える人は、なぜ失敗してしまうのか ダイヤモンド社 (2013)</p>		<p>「『手段』はすべて揃っているが、『目的』は混乱している、これが私たち(現代の)の問題だ。」とはアルベルト・アインシュタインの言葉だ。(ビジネスの世界においても、20世紀は「手段の時代」だった。手段(や手法)が多様化したことで、専門分化が進み、部分最適(縦割りやたこぼ化)が助長され、その結果、「企業の目的」「事業の目的」、そして「働く目的」が見失われてしまった。 しかし、これらの「目的」(purpose)を取り戻した企業、たとえばアップルやグーグル、ホールフーズ、ザッパスのほか、世界的に評価されている社会起業家たちは、製品やサービスのみならず、マネジメントにもイノベーションを起こすと同時に、新しい資本主義を生み出そうとしている。 目的に基づくマネジメントとその実践手法である「目的工学」というフレームワークをわかりやすく提示する案内書である。利益や売上げのことばかり考えているリーダー、自分の会社のことしか考えていないリーダーは、ブラック企業の経営者と変わらない。</p>
<p>山口周 世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか? 経営における「アート」と「サイエンス」 光文社新書 (2017)</p>		<p>VUCAな時代、経営者には、前例のない意思決定が求められる。MBA的な論理的思考だけでは不十分だ。「直感」と「感性」が求められる。 グローバル企業が世界的に著名なアートスクールに幹部候補を送り込む、あるいはニューヨークやロンドンの知的専門職が、早朝のギャラリートークに参加するのは、「直感」「感性」を磨くために、「美意識」を鍛えるためだ。 経営者には、サイエンス(論理的思考)、アート(美意識)、クラフト(経験)に基づく意思決定が求められる。しかし、日本の多くの企業の経営者は、クラフト(経験)に大きく依存した意思決定が未だに行われており、2週遅れ状態である。</p>
<p>ナシム・ニコラス・タレブ 反脆弱性——不確実な世界を生き延びる唯一の考え方 ダイヤモンド社 (2017)</p>		<p>「脆い」のちょうど逆に当たる単語はない。本書で、それを「反脆い」、または「反脆弱性」と形容している。そして、著者は、物事の性質を3つに分ける世界観を提示する。①変動に弱い「脆弱(フラジャイル)」、②変動に強く壊れない「頑健(ロバスト)」、③変動を利用し利得にする「反脆弱(アンチフラジャイル)」だ。 私たちは、「問題解決力」を身につけようとするが、タレブ流にいうならそれは「頑健(ロバスト)」に過ぎない。複雑化した社会システムがゆえに、タレブが「ブラック・スワン」と呼ぶ、「頑健(ロバスト)」を吹き飛ばす、予測不能ながらとてつもない衝撃を与える前代未聞の事柄が生じやすくなっている。正に「コロナ」がその一つだ。人間がコントロールできない自然現象に加え、人為的な不確実性が高まっている現代において、「反脆弱性」を身につけるなければならない。</p>
<p>梶谷 真司 考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門 幻冬舎新書 (2018)</p>		<p>《哲学者の名前が1人も出てこない哲学入門書》 私たちは、「考えている」つもりでも、他人の意見や暗黙の社会のルールに隷属され、単に答え探しをしているだけのことが多い。しばしば目にする、社内ルールがないと判断が出来ないミドル層や、周りの声に振り回される経営層は、正にそんな人達だ。これまでの前例やルールが当てにならないVUCA時代では、「考える」の重要性は益々高まっていくはずだ。 しかし、私たちは、「考える方法」は誰からも教わっていない。 「よく考える」ためには、人と問い、語り合うことで、「考え」は広く深くなる。 その積み重ねが、息苦しい世間の常識、思い込みや不安・恐怖からあなたを解放し、あなたを自由にしてくれる。</p>